

# 自己受容性の研究

—文献的研究と文献目録—

中村昭之  
板津裕己

## はじめに

“自我” “自己” あるいは “己を知る” といった問題は、科学的心理学の創立時から、一時期に停滞期間があったものの、ずっと重要な研究課題にあげられていた。そして、これらの問題は、心理学上だけの問題ではなく、古来から哲学・宗教の領域の中心的问题であった。それらの領域においても、本研究のテーマである “自己受容性” に直接・間接に関連する言及は少なくない。

P. C. Vits (1985) は、今日の心理学における自己理論の先駆者に、神学者の H. E. Fosdick をあげ、彼のパーソナリティ理論は今日の心理学的自己理論研究者、特に C. R. Rogers の考え方と類似していること、そして、彼の理論が後年の A. Adler, G. W. Allport, W. James, Rogers らに影響を与えたと論じている。そして、今日の自己受容性の考え方・概念もすでに彼によって示されているとも述べている。さらに、キリスト教では、自己を受け容れて生かす生き方が望まれ、自己受容性の主たる研究テーマである自己受容と他者受容の問題は、その淵源が聖書に記された、自己愛や隣人愛にあると言われる。

一方、原始仏教においては、“愚かで知慧のない人は自己に尋して仇敵のごとくにふるまう”というように、自己を愛することを説き、“自己を知る人”を尊重している（中村，1963）。また、洞山良价があらわした“宝鏡三昧”は、鏡があるがままの姿を写しだすように、われわれは心をむなしくてすべてのものを如実にみれば、本来われわれのうちにある仏性があらわにされて、真理そのものになりきれるとしている。このように、仏教においても自己受容的な態度の重要性が説かれている。

さらに、莊子にも、“聖人は一切を失うことのない境地、一切をそのままに受け入れる境地に遊び、一切をそのままに肯定する（大宗師篇）”というように、自己受容に通じる記述が見られる。

このように、心理学の立場から“自我”“自己”などの問題が研究されるはるか以前から、自己受容という用語は用いられず、体系化もおこなわれなかったが、自己受容性に類する問題は、洋の東西でいろいろと考えられていた。心理学における“自己受容性”に関する研究は、上述したような隣接領域の知見をその1基盤にして、1940年代以降、臨床心理学や教育心理学の実地的な現場を中心に注目されるようになり、今日までに非常に多くの研究が行なわれてきている。

自己受容の定義・測定法に関しては、これまでに沢崎（1984）が詳細な文献的研究を行なっている。本研究では、自己受容の定義・測定法について再整理をするとともに、自己受容とパーソナリティ特性の関する研究及び心理療法における自己受容の位置づけについて整理すること、これまでに行なわれた自己受容性研究の文献目録を作成することを目的とする。

## I 自己受容性のとらえかた

### 1 自己受容の定義

自己受容は self - acceptance の訳語である。accept という言葉の語義は、英語基本動詞辞典（小西，1976）によると、“事物を同意のもとに受け入れること”であるとして、単に与えられたものを受け入れることを意味する receive

との違いを指摘している。また、基本英語類語辞典（安藤，1976）によれば，acceptには引き受ける意志があると述べられている。これらの語義解釈から，acceptは対象に対して能動的・肯定的な態度をもっていると言える。そして，これらの語義解釈を借りて，自己受容を定義するならば，“自分自身を（能動的・肯定的な）同意のもとに受け入れること”とすることができる。

心理学において，このself-acceptanceという用語が用いられた最も初期の研究は，Rogersが1939年に著した，“The Clinical Treatment of the Problem Child（邦題：問題児の治療）”であろう。この著作において，彼は，“関係療法の親に対する効果は，“感情の明確化”と“自己受容”である”と述べている。ここで，彼は，並列されている“感情の明確化”とあわせた説明は行なっているものの，自己受容そのものについての定義はおこなっていない。しかしながら，この時点ですでに彼は自己受容をすることによって，パーソナリティが成長し，何んらかの変化が生じるであろうと考えている。

Rogersが自己受容という概念を臨床場面での視点の1つにおくようになっただきっかけの1つには，関係療法やH. R. Mowrer, F. Allenらの先人の影響の他に，ロチェスター時代の問題児研究に用いた，“構成因子法”のなかの“自己洞察”の項の影響があるでないかと思われる。この“自己洞察”の項を取り入れた理由やその定義には，後年の自己受容の定義に通じるものが感じられる。そして，今日の心理学における自己受容は，特に，このRogersの自己理論と強く結びついていると言われている（D. P. Crowne & M. W. Stephens, 1961）。

A. W. Combs & D. Snygg（1949）は，“自己受容とは自己の現実の姿について正確な観察を行ない，自己の特徴を十分に自覚していることであり，それは自己に対する是認的・肯定的態度ではない”と定義した。この定義について我妻（1964）は，“彼らの定義する自己受容の程度は，インテンシブな面接を繰り返すことである程度まではとらえられることが出来ても，質問紙その他の調査道具を用いて実証的にとらえることは不可能である”と述べている。我妻の見解によれば，Combs & Snyggの言うところの自己受容（またはその度合い）は，自分自身では知ることの出来ない，本人以外の人によってとらえら

れた自己受容（またはその度合い）と言える。

国分（1979）も同様に、自己受容と是認とを区別して考えている。彼は、“自己受容とは、あるがままに自分を許すことである。自分をとがめないことである。自分で自分をいたわることである”と定義している。そして、是認には善悪判断があり、知性であるものであるのに対し、受容は不思善悪、感情であるものだととらえている。さらに、この不思善悪ということで関連する定義に、小口（1983）の“自己受容は、自分のあるがままの姿を受け入れること。その際、自己についての善悪・是非などといった対立観念ははいりこまない”がある。彼らによって定義された自己受容は、Combs & Snygg の定義と同様に、自己について経験することを好ましくないものも拒否・抑圧せずに、自分の一部として自己体制のなかに受け入れるという意味であろう。

Rogers（1949）は、“自己受容は、自己に対する肯定的態度である”と定義している。そして、自己評価や自己満足と同義に扱っている。彼は、受容されているか否かの程度を問題にするのではなく、受容としてありのままの特徴を受け入れる態度・構えを中心におく。このような視点は、Combs & Snygg の視点とあまり変わらないように思われる。本来の意味での自己受容の程度の測定が困難であるために、Rogers のいう態度・構えが、肯定的な意見の増大に伴って示されることから、指標としての自己受容、自己受容度は、自己に対する肯定的な態度におきかえられたのであろう。そして、それ故に、自己評価や自己満足と同義に扱われるようになったのではないか。

先に述べた国分のように、感情の問題を自己受容の中心においている研究者に、水島（1969, 1971）や梶田（1980）がいる。梶田は、“自己受容は、自分自身に関してどの程度まで正確で完全な認識を持っているかの程度である”と定義し、自己受容は自己成長的な意欲や態度の基盤になるとも述べている。水島は、自己受容を感情過程の問題と現実過程（自我関与）の問題に分けて考える。さらに、自己受容は単なる自己充足機能ではなく、現状を“これでいいのだ”として、発展を停滞させてしまうものではなく、主体の立ち向かう姿勢、生きる姿勢を含めてとらえようとしている。彼らの見解は、感情の問題を中心におくこ

とだけでなく、生き方・自己成長の意欲との関連を指摘することにおいても共通点が見られる。

今日に至るまで、各研究者の共通した自己受容の定義・見解は確立していない。その中で、多くの研究者に見られる大まかな共通点として、“自己受容は、ありのままの自己を抑圧・歪曲なしに受け入れること”“操作的には”“現実自己”と“理想自己”の一致度であらわされる”などがあげられる。

以上は、主として現象学的心理学と言われる立場での考え方であるが、精神分析的な立場からも自己受容についての定義を行なっている。まず、J. Block & T. Thomas (1955) が、“自己受容とは、自己統制構造機能である”という定義をしている。小此木は、自己受容を、“残酷な超自我の緩和や、過大な自我理想との緊張の緩和、病的に肥大した防衛の解決、魔術的な万能感への固執の解決などと表裏をなす自己愛（自己評価）の獲得を意味する”（1974），“自我の防衛の解決”（1978）と定義している。国分・国分（1984）も、“自己受容できないことは超自我が強すぎることである”という旨を述べている。この記述は、小此木の定義に通じるものがある。

さらに、“自己受容はフロイトの成熟した性器段階（genital stage）に相当すると思われる”（R. W. Siroka ら、1971），“自己受容感はエリクソンの有能感に対応するものであろう”（木下、1983）というように、自己受容を精神分析的な用語や考え方に結びつけて述べている例がある。

これまでに自己受容している人の特徴が、多くの研究者によって述べられてきている。そのなかで、後年の各研究者が自己受容の定義説明をするにあたって、最もよく引用されているのは、E. Sheerer (1949) の記述であると思われる。彼女は、自らの臨床経験に基づいて、22項目にわたって自己受容している人の特徴を記述した。その詳細は、既に林（1965）、宮沢（1977）らによって紹介されているので、ここでは省略する。

各研究者の自己受容の定義は、そのまま各研究者が考える自己受容している人の特徴であると言い替えられる。これらを大まかに整理すると、自己受容している人は、豊かな自己理解、自己の内面的な安定性、適度な自信をもち、

他者を尊重し、円滑な対人関係をとることができるなどの特徴がある。

林は、ケースについて検討を重ね、5段階からなる自己受容評定基準を作成した。ここでは、自己受容の度合いが深まっていくにつれて、自分自身のとらえかたが変容していくさまがあらわされている。この自己受容評定基準各段階の記述の一部を表1に示す。

## 2 自己受容と関連概念について

自己概念 (self-concept) は “その人自身のパーソナリティの全体的・包括的な評価” (F. J. Bruno, 1986) である。そして、その自己概念の質的分析視座が自己受容の問題だと考えられている (B. R. McCandless, 1970)。自己意識研究に用いられる用語には、これらの他に、自己評価<sup>注)</sup> (self-esteem, self-evaluation), 自己知覚 (self-perception), 自己尊重 (self-regard), 自己一致 (self-congruence), 自己満足 (self-satisfaction) などがある。この項では、自己受容とこれらの関連概念の関係について整理していく。

R. C. Wylie (1974) は、現象学的自己研究で用いられている自己満足、自己受容、自己評価、自己一致などのもつ意味は学問的に同じではないとする一方で、これらの用語のもつ意味は互いに重なり合い、各用語を明確に区別することは困難であり、これらの用語をグループにして検討する必要を説いている。そして、自己に対する評価的態度として、これらの用語を含めた自己尊重あるいは自己尊重的態度 (self-regarding attitude) という用語を用いている。

自己受容と自己評価との関連について、E. Silber & J. S. Tippett (1965) は、自己受容と高い自己評価とを殆ど同義にとらえている。その一方で、M. Rosenberg (1965) は、“自己受容は、自己の長所・短所を知り、それを受け入れることを意味しているが、高い自己評価は、単に自分を受け入れるだけでなく、自分の欠点を克服し、成長したいと思い、また克服できる自身をもつことを意味する”と述べ、両概念は異なるものととらえる。しかしながら、彼の高い自己評価の定義は、Rogers の自己受容の定義とほぼ一致するので、結果的に、Rosenberg の場合も自己受容と高い自己評価は同義であるとみなす

<sup>注)</sup> self-esteem は自尊心、自尊感情とも訳されるが、ここでは自己評価とする。

評定段階	自分自身のとらえかた
+ 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自己概念と経験とがいちじるしく一致に近づき、内在化された行動基準、価値規準に対する無条件的尊重ができるようになる(単なる自己満足を意味しない)。</li> <li>• 自己は防衛される構造ではなく、主として経験の過程における反省的意識であり、内面的経験の豊かな変化しつつある意識である。</li> <li>• 自己の欠点・長所に感情的反応を示すことなく受容する。「……しなければならぬ」という強迫的な考えにとらわれず、自主的に問題に対処しうる。</li> </ul>
+ 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自己の行動・価値基準を尊重しようとするが、ときにそれが動揺することもある。</li> <li>• 自己の感情を受容し、それを自分のものと認めるようになれる。以前意識に否定されていた感情が直接的に受容され、経験されるようになる。</li> <li>• 存在する問題について、明白な責任を感じてくるようになり、問題に対して積極的な態度をとる。</li> </ul>
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自己概念と経験との距離が少なくなり、部分的・条件的受容がみられる。経験しているが否認されていた態度に気づく。</li> <li>• 自己評価を客観的になそうとする態度がみられるが、まだ感情に支配される場合もある。</li> <li>• 行動面でも、自分の気持ち・考えに従った行動と、外的枠組に従った行動がある。自発性が感じられる。</li> </ul>
- 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自己について不一致の意識がわずかに認められる。</li> <li>• 感情に対する意識は若干認められるが、自分のものとしては受け容れられない。自己に関係のある過去の感情をわずかに表現しはじめる。</li> <li>• 自己の不安の非現実性、防衛の非合理性に気づいても、それは否定されやすい。問題の存在がいくらか認められるようになり、自己にとってそれは外的なものとして認められ、問題に対する責任感はない。</li> </ul>
- 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自己概念と経験との間に、いちじるしい差異がみられるが自分ではその距離を意識せず、自己概念と矛盾した経験を受け容れない。</li> <li>• 受容的条件にあっても自己を表現せず、自己の問題として問題を認めず、自己変化の要求がない。まったく洞察がなく、自己に対する叙述が抽象的・観念的で言葉に感情がこもっていない。自信がなく、自己は無意味な、特別に異なった、劣等な人間だと思っている。</li> <li>• 自己の行動の評価が、まったく他者の意見・判断に依存し、そのことに懸念・不満を感じていない。</li> </ul>

ことができる。

後述するように、現実自己と理想自己との差異を自己受容度ととらえる測定法がある。この差異点には、その他に、自己一致度あるいは現実自己と理想自己のズレ (self-discrepancy) という表現 (用語) が用いられる。これらは同じ算出法をとっており、意味としては全く同義と考えていいものと思われる。

上田 (1969, 1983) は、自己客観化には自己受容の意味が含まれる、欲求の主体は自我あるいは自己であるから、自己受容は欲求受容を意味する、また自己の充実感は同時に自己の安定感であり、自己の受容を意味すると考えている。さらに、自己受容している人は、その溢れるばかりの余力を創造性に、愛情に、自己実現に充当する (上田, 1969)、自己実現している人の特徴としてたかめられた自己の受容があげられている (A.H. Maslow, 1962) というように、自己実現との間にも関連性が指摘されている。さらに、その他に、自己受容は K. Horney のいう真実の自己 (real self) とも非常に類似した概念だとも言われている (Crowne & Stephens, 1961)。

なお、self-acceptance の訳語には、自己受容の他に、“自己認容”が用いられる例がある (北村, 1977)。

## II 自己受容の測定法について

### 1 自己受容の測定法

自己受容 (指標としての自己受容度) を測定する方法は以下のように分類される。

- 1 現実自己と理想自己との差異に焦点をあてる方法
- 2 チェック・リスト法
- 3 自己評定法
- 4 投影法
- 5 クライエントの発言内容を分析・評定する方法

1～3までは被験者自身によって意識された自己受容の程度がとらえられる。



一方、4は被験者自身が意識されないレベルでの自己受容の程度をとらえようとする。5は、面接場面でのクライアントの発言内容を相談者・セラピストが分析・評価した自己受容の程度である。

1の現実自己と理想自己との差異に焦点をあてる方法の主な研究法として、Q分類法とSD法があげられる。W. Stephenson (1953)によって考案されたQ分類法は、質問事項を記入したカードを被験者に示し、その事項が自分自身にどの程度あてはまるかを分類させて、被験者の自己照合枠をあらわそうとする。このQ分類法で最もよく用いられるのは、通称BHQと呼ばれている、J. M. Butler & G. V. Haigh (1954)が作成した尺度である。BHQでは、現実の自己(自己分類)とどのようにありたいか(理想分類)について質問事項を分類させ、両分類の相関関係によって求められる一致度が自己受容の度合いとみなされる。シカゴ大学時代のRogersとその共同研究者は、このBHQを用いて多くのカウンセリングの治療効果の研究を行なった。

SD法は、ある概念をいくつかの形容詞対に、主として5段階あるいは7段階で評定するもので、C. E. Osgood (1957)によって定式化された研究法である。自己受容性の研究では、“理想の自己”と“現在の自己”についてを評定し、その差異点を求めて自己受容の度合いとする。この差異点の求め方には、2通りの方法がある。その1つは、対応する各項目ごとの差(d)を2乗して、項目数で割ったものの平方根を差異点とするもので、次の式であらわされる。

$$\sqrt{\sum_{i=1}^n di^2 / n}$$

この算出法は、長島ら(1967)、椎野(1966)や中西ら(1978)などで用いられている。また、もう1つの算出法は、対応する各項目ごとの差(d)の絶対値を総和して差異点にあてるものである。この方は、次の式であらわされる。

$$\sum_{i=1}^n |di|$$

この方法は、J. D. Horzbergら(1964)が用いている。佐野(1976, 1977)は、双方の算出法を用いて検討しているが、得られる結果に大きな差は見い出

されなかった。

2のチェックリスト法は、あらかじめチェックリストに用いる項目を、好ましい項目と好ましくない項目に分けておき、被験者に自分に適当な形容詞や記述文をチェックさせる。そして、好ましい項目へのチェック数を全チェック数で割って得られた値を自己受容度とするものである。質問項目には主として形容詞が用いられている。

この方法による自己受容尺度には、H. G. Gough (1955) や加藤 (1962, 1977) のものがある。その他にあらかじめ形容詞ごとに重みづけが行なわれているものに川岸 (1972) がある。

Gough は、この方法でとらえられる自己受容は、“自分自身を好ましい人間として見る程度”であり、Rogers らが考えている自己受容とは異なるものと述べていることに留意する必要がある。

3の自己評定法は、自己受容性の意味内容を持つ質問項目を直接提示し、その項目への反応によって自己受容度をとらえようとする方法である。多くの場合、5・7段階の評定段階が設けられ、項目ごとに最もあてはまると思う段階に自己評定していく。評定段階には、あらかじめ得点が与えられており、各質問項目ごとの得点を合計して自己受容得点（自己受容度）とみなす。

この方法を用いた尺度には、E. Sheerer (1949), E. Phillips (1951), E. M. Berger (1952) などがあり、これまでに作成された尺度の総数はかなりにのぼると言われている。これらの他にも、R. E. Bills ら (1951) が作成した、Index of Adjustment and Value (IAV) や J. J. Brownfain (1952) の尺度がある。Bill らの尺度は、形容詞対について自己評定するものであり、Brownfain の尺度は、肯定的自己と否定的自己について自己評定し、その差異点（彼の尺度の場合は、肯定的自己得点から否定的自己得点を引いて求める）を自己受容度としている。これらは1にあげたSD法と自己評定法の中間的なものと言える。

4の投影法を用いた研究として、Rorschach Test による自己受容度指標が考えられている。B. Kropfer ら (1954, 1970) は、自己受容度の高い人の反応特徴として、(H) や Hd と結合しないようなMとFMが適切に生じること

をあげている。戸川ら（1958）も  $M^+$ （良質の人間運動反応）を自己受容度の指標においている。

また、I. M. Rubin（1967a, 1967b）は、SCTを用いて自己受容度をとらえようと試みている。彼は、R. J. Dorrisら（1954）の研究を出発点の1つにしているが、Dorrisらは self-acceptance という表現を用いず、ego-acceptance という用語を用いていること、Rubinの自己受容度の算出法は、ego-threatening（自我脅威）反応（#ET）の総計とすることなどから、彼の言う自己受容性は、他の研究者がとらえている自己受容性とはいくらか意味が異なるものと考えられる。

5のクライアントの発言内容を分析・評定する研究としては、まず R. E. Kauffmanと V. C. Raimy（1949）が用いたRaimyの自己態度測定法があげられる。これは、自己照合の肯定的（P）、否定的（N）、両向的（Av）な性質を用いた指数で、次のような式で求められる。

$$P \cdot N \cdot Av \cdot Q = \frac{N + Av}{P + N + Av}$$

この指数が0に近いほどよく自己を受容しているとされる。

先に自己受容している人の特徴の項でとりあげた林の自己受容評定規準も、この相談者・セラピストが評定する方法で自己受容の程度を知る目的で作成されたものである。

## 2 自己受容尺度の構成概念について

前述で述べたように、これまでに非常に多くの自己受容尺度が作成されている。初期の自己受容尺度は、各々の研究者の臨床的経験を基盤におくものが多く、自己受容の全体的な把握を目的にするのか、尺度合計点を算出して自己受容度にあてるものが多かった。しかしながら、近年のめざましい計算機の発達を背景の1つにして、統計的手法を用いて自己受容性を構造的に分析する研究が多く行なわれるようになった。表2は、自己受容性・自己受容尺度の構造的研究で見いだされた構成概念（構成因子または軸）である。これらの結果は、いずれの尺度も自己受容が必ずしも単次元のものではないこと、むしろ、いく

表 2 - 1 自己受容尺度の構成因子・軸および Subscale

## I A V (Index of Adjustment and Values) (Bills, 1953)

対 象：大学生，女性

分析方法：セントロイド法，直交回転法

- I Freedom from Anxiety (不安からの解放)
- II Motivation for Intellectual Achievement (知的な目標達成への動機づけ)
- III Offensive Social Conduct (社会での攻撃的なふるまい)
- IV Social Poise and Self-Confidence (社会での平静さと自信)
- V Warm-Hearted Attitude toward Others (他者へのあたたかな態度)
- VI Impersonal Efficiency (個人の感情をあらわさない効率性)
- VII Dependability (頼りになること)

注：Mitchell. Jr, (1962) による研究結果

## W A L (Willingness to Accept Limitations) (Berger, 1961)

対 象：大学生，男・女

分析方法：セントロイド法，直交回転法

- I High Standards (高い規範)
- II Wholeheartedness Regarding Achievement (目標達成に専心努力すること)
- III Belief in Achievement with Little Effort (すくない努力で目標達成することへの確信)
- IV Willingness to Risk (危険なことに対するやる気)

## 宮沢 (1979)

対 象：中学生・大学生，男・女

分析方法：セントロイド法，プロクラテス回転法

- I 生き方の充実性
- II 自己卑下・自信の欠如
- III 自己洞察・自己客観視
- IV 物事にこだわらないおおらかさ
- V 人との信頼関係にもとづいた楽しい生活

表 2 - 2

沢崎・真仁田・小玉 (1982)

対 象：高校生，男・女

分析方法：数量化理論第Ⅲ類

- I 一般的受容性
- II 外面性
- III 行動的弱さ

板津 (1983・1987)

対 象：大学生，男・女

分析方法：主成分分析法，直交バリマックス回転法

- I 積極的に生きる姿勢 (生き方)
- II 対人場面における自己受容性 (他者との関わり方)
- III 自己のおかれている立場の受容性 (自分自身への満足感)
- IV 自信・自己信頼性 (自信・自己信頼に欠けていないこと)
- V 情緒安定性 (情緒不安定でないこと)
- VI 自分自身にこだわりをもたない態度 (削除)

注：( ) は短縮版作成にあたり修正した意味づけをあらわす

佐藤・沢崎 (1984)

対 象：大学生，男・女

分析方法：数量化理論Ⅲ類

- I 開放性
- II 真面目さ
- III 自己中心性

つかの異なる成分を有し、これらの尺度で測定される自己受容はいくつかの概念の構成体であることを示している。

表2にあげた研究は、それぞれの質問項目・研究対象・分析方法などが異なり、全てを同列において比較検討することはできないが、これらの結果間に大まかな共通性が見られるように思われる。すなわち、多くの研究において、“生き方・やる気”、“良好な他者との関わり方”、“自信”、“(自分自身に) こだわりをもたないこと”などを意味する構成概念が見られる。

同様に、パーソナリティ研究・パーソナリティ尺度の構造的研究を行った結果、その下位概念に自己受容性をおくものがあらわれてきた。下位概念に自己受容性をおいたパーソナリティ尺度の主なものを以下に示す。

Personal Orientaton Inventory

(略称 P O I, E. M. Shostrom, 1962. 村山ら 1977. 伊藤 1980)

California Personality Inventory

(略称 C P I, H. G. Gough, 1957. 我妻ら 1967)

自己評価的意識尺度 (梶田, 1980)

開放性尺度 (西川, 1986)

### Ⅲ 自己受容性とパーソナリティ特性について

#### 1 自己受容とパーソナリティ特性との関係について

本項では、自己受容とパーソナリティ特性の関係、すなわち、自己受容している人、自己受容していない人がどのようなパーソナリティ特性を示すのかを検討した研究を整理する。パーソナリティ特性の指標に用いられている主なテストは、MMP I, Y-G 性格検査, MAS, Rorschach Test などである。

自己受容とMMP Iとの関係を調べた研究には、E. M. Berger (1955), J. Block & H. Thomas (1955), M. Zuckerman & J. Monaskin (1957)がある。いずれ研究においても自己受容得点と有意な相関関係を示した下位尺度は、K 尺度 (防衛的態度), D 尺度 (抑うつ性), Pt 尺度 (精神衰弱症), Sc 尺度 (精神分裂症), Si 尺度 (社会的向性) であり、その逆に、Ma 尺度 (軽躁病)では、

いずれでも有意な相関関係を示さなかった。これらの結果からは、自己受容している人のパーソナリティ特徴として、防衛的態度が弱いこと、自分自身に自信があり、無力感を感じないこと、社会的接触を求め、社会的規範を守るといふようなことがあげられる。

柳井（1969）は、Y-G性格検査をパーソナリティ特性の指標にして、検討を行なっている。その結果、因子レベルでは、D（抑うつ性）、C（回帰性傾向）、I（劣等感）、N（神経質）、O（客観性欠如）、Co（協調性欠如）において、低自己受容群が有意に高い得点を得、G（一般的活動性）、A（支配性）、S（社会的向性）では、高自己受容群が高い得点を得ていた。また、グループレベルでは、自己受容得点と情緒安定性、社会適応性、衝動性に負の、主導性とは正の有意な相関関係がみられた。

さらに、M. Pulisuk（1963）や F. W. Ohnmacht & J. J. Muro（1967）が、自己受容と不安傾向の関係を調べている。そして、いずれでも、自己受容している人は、自己受容していない人と比べて低不安であることが見いだされた。

これらの研究結果を通して見ると、自己受容している人のパーソナリティは、内的には安定した、社会的には積極的、適応的というような、一般に望ましい考えられている特徴を示している。

その他にも、Pulisuk（1963）が、16 PFと自己受容の関係について、吉川（1984a, 1984b, 1985）が、自己受容と Ambiguity Tolerance との関係を調べた研究がある。

上記のような質問紙パーソナリティテストを指標に用いたものの他に、Rorschach Test などの投影法パーソナリティテストを指標に用いた、R. E. Bills（1953）や F. E. LaFon（1954）の研究がある。

Bills と LaFon では、結果の処理法が異なり、いずれにおいても高自己受容群にP反応が多く見られること以外に共通する結果は見られない。この結果は、自己受容している人は、現実との適切な関係を維持できることをあらわしている。その他に、LaFon では、高自己受容群に自我が強いことを見いだしている。

一方, Bills では, 高自己受容群は自己本位的で, 他者との適切な妥協ができないことをあげ, 低自己受容群は自己統制力を有するというような結果を得ている。この Bills の結果は, これまでにとりあげてきた自己受容とパーソナリティ特性の関係を否定するものである。

測定法の項でとりあげた, Kropfer らや戸川らの自己受容指標は, 創造性や内的安定性, 内的 control の指標にもなっている反応内容であるが, Bills や La Fon の結果は, Kropfer らの自己受容指標仮説を満たしていると言えない。

## 2 Locus of Control との関係について

自己受容している人は, 自分自身の態度, 思想, 価値, そして信念にもとづいて機能している (A.T. Jersild, 1952), 自分のよりどころにしている基準を他者の期待にではなく, 自分自身の経験に基づくものとして知覚する (中野, 1974) と考えられている。一方, Rotter (1966) は, Locus of Control の internal-external は, 各人が自分自身を信じる程度であるとしている。このように考えられている両概念の意味あいには関連するものが感じられる。これらの概念間の関係については, J. P. Lombardo ら (1975), T. A. Chandler (1976), R. L. Drwal (1977), 柳井 (1977) らが検討している。それぞれが用いた自己受容尺度や Locus of control 尺度, 研究対象が異なり, 研究地域も日・米・ポーランドにわたっているが, いずれの結果においても自己受容性と internal (内部統制的) との間に有意な正の相関関係が, あるいは, internal 群は, external 群と比べて, 有意に自己受容的であることが見いだされている。これらの結果は, 自己受容を視点にすれば, 自己の能力や努力を強調する傾向の人は, 運やチャンスを強調する傾向の人よりも, 自分自身を肯定的に受容していること, 自分自身を信頼できるということが, 行動の規範を自分自身に置くことに作用することを示している。

# IV 心理療法における自己受容性について

## 1 心理療法における自己受容性について

Crowne & Stephenson (1961) は, 自己受容は多くの心理療法の Therapeu-



tic-Goal とみなされていると述べている。その中で、特に自己受容の重要性を強調しているのが、Rogers のクライエント中心療法の流れである。この Rogers のクライエント中心療法に影響を及ぼしたと考えられる関係療法も、自己受容の意味について説いている。自己受容研究の初期には、自己受容度をカウンセリングの治療効果を知る指標にした研究が多い (E. Sheerer, 1949. C. R. Rogers & R. F. Dymond, 1954. など)。それらでは、治療が進むにつれて、自己受容度が高まっていくこと、あるいは、治療効果が認められたケースの自己受容度が明らかに上昇していることが見いだされ、自己受容度はカウンセリングの治療効果指標になり得ることを示している。それゆえに、セラピーの過程の中で、意識的に拒否したり、あるいは歪曲して意識しなくなっていくことが自己受容なのである (牛島, 1969) とも考えられている。

クライエント中心療法と同様に認知的再体制化による性格の改善を目指す、A. Ellis の R E T (Rational Emotive Therapy) や A. T. Beck の認知療法などでも自己受容が重要視されている。

一方、先の関係療法に関連する精神分析的立場においても、表現にいくらかの違いがあるものの、自己受容することの重要性を説いている。初期の精神分析家の作業仮説によれば、人間を病気におとし入れるような種類の罪悪感は、“いつわり” についての罪悪感であると考えられていた。そして、治療的には、あるがままの自分を受容させることに強調点がおかれていた (S. W. Standal, et. al., 1959)。そして、精神分析の流れをくむ、W. Reich や O. Rank らの関係療法でも、上記のように自己受容の重要性を説く。さらに K. Horney, E. Fromm H. S. Sullivan らになると、彼らの主張する理論・概念は、Rogers らがとらえている自己受容に非常に類似するようになった。小此木 (1978) は、精神分析療法における自我の防衛の解決は自己受容を治療機序とみなすと考えている。この精神分析療法も、治療法や治療者の役割ということでは他の治療方法と一線をおくものの、自己受容についての基本的な考え方は共通することが多いと思われる。

日本独自の心理療法である森田療法においても自己受容は強調されている。

このことは既に、土沼・水島（1982）や沢崎（1984）などで指摘されている。特に、沢崎は自己受容と森田療法の関係を詳しく検討し、森田のいう“あるがまま”を英訳するならば、“self-acceptance”になると述べている。また、この森田療法はいくつかの段階に分けられているが、その中で、最も自己受容が強調されるのは第1期にあたる臥褥療法期であるとの指摘がある（近藤, 1976）。

各心理療法における自己受容の意味で共通しているのは、個人療法であれ、グループ療法であれ、自己受容することによって自己認知の変化や現実世界の受容が生じるようになる。さらに、自己認知変化などがクライアントの持っている問題を解消していくということであろう。そのような意味で、心理療法における自己受容の位置は、Therapeutic-Goal というよりも、一次的なパーソナリティ変化・パーソナリティ成長の始まりだと言える。

## 2 セラピスト・相談者の問題について

自己受容性は、クライアントに求められる特性だけでなく、“治療者として、その人間がどれだけよい精神衛生を展開しているのかを問うものとして、「自己受容、自己適応」が治療者に重視される特性である。”（佐治, 1967），“カウンセリング関係におけるカウンセラーの条件に、自己をあるがままに受容できること（純粋性または自己一致）。”（伊東, 1969），“相談者の資質条件として、その人格特性としては、人間的な暖かみをもち、自己受容ができていることがあげられる。”（江川, 1986）というように、セラピスト・相談者にも求められる特性でもある。

これらの研究者は、セラピストが自己を受容することができないでいるならば、自分自身の偏見と感情によって自己が歪められ、事態をしっかりと認識することもできない。そのような“満ち足りた落ち着きをもたない”人には、クライアントの問題、クライアント自身をあるがままに受け入れることなど困難であると考えているのであろう。それは、自分自身を受け容れられないならば、他者を受け容れるということとはできない、他者受容するには自己受容していることが前提であることを示唆するものと思われる。

## V 自己受容性に関する文献について

自己受容性に関する欧文文献（著書・論文）と国内研究（著書・論文・学会発表）のリストを以下にあらわす。なお、欧文文献については、比較的入手しやすい英文文献に限った。

近年の自己受容性研究は、欧米・国内ともこの領域が研究され始められた頃と比べてあまり活発でない。研究内容は教育・臨床（心理療法・テスト）への適用が中心であるが、実験的研究への応用も見られる。研究されている地域は、米国の他に、近年ではポーランドを中心とした東欧圏での研究が盛んなようである。また、国内では発達的研究と自己受容尺度構成に関する研究が多い。

ここでは、欧文文献は、Psychological Abstracts 誌の研究領域分類を参考にして、

- 1 発達心理学・教育心理学領域に関する研究
- 2 社会心理学領域に関する研究
- 3 人格心理学・臨床心理学領域および他者受容との関係に関する研究
- 4 その他

の4テーマに分類した。

欧文文献のリスト作成にあたっては、主として、The Self-Concept vol. 1, (Wylie, 1974) と Psychological Abstracts 誌を利用した。

## 自己受容性に関する欧文文献

## 1 発達心理学・教育心理学領域に関する研究

- Barnes, G. E., & Vulcano, B. A., 1982. School self-acceptance among Canadian Indian, White, and Metis children. *Canadian Journal of Behavior Science*, 14, 60~70.
- Bills, R. E., 1956. Personality changes during student centered teaching. *Journal of Educational Research*, 50, 121~126.
- Bruce, P., 1958. Relationship of self-acceptance to other variables with sixth grade children oriented in self-understanding. *Journal of Educational Psychology*, 49, 229~238.
- Clance, P. R., Matthews, T. V., & Joesting, J., 1979. Body-cathexis and self-cathexis in an interactional, awareness class. *Perceptual & Motor Skills*, 48, 221~222.
- English, R. M., & Higgins, T. E., 1971. Client-centered group counseling with pre-adolescents. *Journal of School Health*, 41, 507~510.
- Graham, J. R., & Barr, K. G., 1967. Q-sort study of the relationship between students' self-acceptance and acceptance of their college. *Psychological Reports*, 21, 779~780.
- Hatfield, A. B., 1961. An experimental study of the self-concept of student teachers. *Journal of Educational Research*, 55, 87~89.
- Jersild, A. T., & Helfant, K., 1953. Education for self-understanding. Bureau of Publications.
- Jersild, A. T., 1955. When teachers face themselves. Bureau of Publications. (船岡三郎訳 自己をみつめる 不安の解決と共感, 創元社, 1975)
- Jersild, A. T., 1957. The psychology of adolescence. The Macmillan Co..
- Kakkar, S. B., 1967. Adjustment and self-acceptance. *Manas*, 14, 31~34.

- King, M., 1976. Changes in self-acceptance of college students associated with the encounter model class. *Small Group Behavior*, 7, 379-384.
- Kranzler, G. D., 1970. Some effects of reporting scholastic aptitude test scores to high school sophomores. *School Counselor*, 17, 218-227.
- MacDonald, R. R., 1973. Parataxic distortion and perceived parenting. *Journal of Genetic Psychology*, 123, 337-343.
- Massad, C. M., 1981. Sex role identity and adjustment during adolescence. *Child Development*, 52, 1290-1298.
- Medinnus, G. R. & Curts, F. J., 1963. The relation between maternal self-acceptance and child acceptance. *Journal of Consulting Psychology*, 27, 542-544.
- Medinnus, G. R., 1965. Adolescents' self-acceptance and perceptions of their parents. *Journal of Counseling Psychology*, 29, 150-154.
- Minde, K. K., Hackett, J. D., Killou, D., & Silver, S., 1972. How they grow up: 41 physically handicapped children and their families. *American Journal of Psychiatry*, 128, 1554-1560.
- Mitchell, J. V. Jr., 1959. Goalsetting behavior as a function of self-acceptance, over-and underachievement, and related personality variables. *Journal of Educational Psychology*, 50, 93-104.
- Pannes, E. D., 1963. The relationships between self-acceptance and dogmatism in junior-senior high school students. *Journal of Educational Sociology*, 36, 419-426.
- Perkins, H. V., 1958a. Teachers' and peers' perceptions of children's self - concepts. *Child Development*, 29, 203-220.
- Perkins, H. V., 1956. Factors influencing change in children's self-concepts. *Child Development*, 29, 221-230.
- Smith, J. K., 1982. Irrational beliefs in a college population. *Rational Living*, 17, 35-36.

- Strong, D. J., 1962. A factor analytic study of several measures of self-concept. *Journal of Counseling Psychology*, 9, 64-70.
- Swanson, B. M., & Parker, H. J., 1971. Parent-child relations: A child's acceptance by others, of others, and of self. *Child Psychiatry & Human Development*, 1, 243-254.
- Taylor, C. & Combs, A. W., 1952. Self-acceptance and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 16, 89-91.
- Trent, R. D., 1957. The relation between expressed self-acceptance and expressed attitudes toward negroes and whites among negro children. *Journal of Genetic Psychology*, 91, 25-31.

## 2 社会心理学領域に関する研究

- Andersen, S. M., 1978. Sex-role typing as related to acceptance of self, acceptance of others, and discriminatory attitude toward women. *Journal Research in Personality*, 12, 410-415.
- Bailey, R. C., Finney, P., & Bailey, K. G., 1974. Level of self-acceptance and perceived intelligence in self and friend. *Journal of Genetic Psychology*, 124, 61-67.
- Coons, W. H., McEachern, D. L., & Annis, H., 1970. Generalization of verbally conditioned self-acceptance to social interaction in small group discussions. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 2, 105-115.
- Goodman, M., 1964. Expressed self-acceptance and interspousal needs: A basis for mate selection. *Journal of Counseling Psychology*, 11, 129-135.
- Ino-Oka, H., & Matsui, T., 1977. An extended use of the instrumentality theory of attitude for obtaining self-acceptance measures. *Journal of Applied Psychology*, 62, 124-126.

- King, M., Payne, D. C., & McIntire, W. G., 1973. The impact of marathon and prolonged sensitivity training on self-acceptance. *Small Group Behavior*, 4, 414-423.
- Kumar, U., & Vachani, S., 1977. Interpersonal perception method: An additional dimension of the feeling of being misperceived and self-acceptance. *Journal of Social Psychology*, 102, 153-154.
- Lundy, R. M., & Katkovsky, W., Cromwell, R. L., & Shoeker, D. L., 1955. Self-acceptability and descriptions of sociometric choices. *Journal of Abnormal & Social Psychology*. 51, 260-262.
- McIntyre, C. J., 1952. Acceptance by others and its relations to acceptance of self and others. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 47, 624-626.
- Murstein, B. I., 1971. Self-ideal-self discrepancy and the choice of marital partner. *Journal of Consulting Psychology*, 37, 47-52.
- Murstein, B. I., & Beck, G. D., 1972. Person perception, marriage adjustment, and social desirability. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 39, 396-403.
- Reese, H. W., 1961. Relationships between self-acceptance and sociometric choices. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 62, 472-474.
- Sarbin, T.R., & Rosenberg, B.G., 1955. Contributions to role-taking theory. *Journal of Social Psychology*, 42, 71-81.
- Stone, L. A., & Winkler, R. C., 1964. Utility for risk behavior as a function of selected self-acceptance and response-set measure. *Journal of General Psychology*, 71, 65-69.
- Veldom, D. J., & Worchel, P., 1961. Defensiveness and self-acceptance in the management of hostility. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 63, 319-325.
- Walsh, W. B., et al. 1973. Consistent occupational preferences and satis-

faction, self-concept, self-acceptance and vocational maturity. *Journal of Vocational Behavior*, 3, 453~463.

Wills, F. N., 1987. The mere exposure hypothesis and self-acceptance. *Journal of Social Psychology*, 127, 105~107.

Zelen, S. L., 1954. Acceptance and acceptability : An examination of social reciprocity. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 316.

### 3 人格心理学・臨床心理学領域および他者受容に関する研究

Acosta, F. X., & Sheehan, J. G., 1978. Self-disclosure in relation to psychotherapist expertise and ethnicity. *Journal of Community Psychology*, 6, 545~553.

Aden, L., 1984. Pastoral counseling and self-justification. *Journal of Psychology & Christianity*, 3, 23~28.

Allport, G. W., 1961. Pattern and growth in personality. Holt.

(今田恵監訳 人格心理学 (上・下), 誠信書房, 1968)

Beer, M., Buckhout, R., Horowitz, M. W., & Levy, S., 1959. Some perceived properties of the difference between leaders and non-leaders. *Journal of Psychology*, 47, 49~56.

Bendig, A. W., & Hoffman, J. L., 1957. Bills' Index of Adjustment and the Maudsley Personality Inventory. *Psychological Reports*, 3, 507.

Berger, E. M., 1952. The relation expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 47, 778~782.

Berger, E. M., 1955. Relationships among acceptance of self, acceptance of others and MMPI scores. *Journal of Counseling Psychology*, 2, 279~284.

Berger, E. M., 1961. Willingness to accept limitations and college achievement. *Journal of Counseling Psychology*, 8, 140~146.



- Berger, E. M., 1963. Willingness to accept limitations and college achievement. A replication. *Journal of Counseling Psychology*, 10, 176 - 178.
- Bills, R. E., Vance, E. L. & McLean, D. S., 1951. An Index of Adjustment and Values. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 257-261.
- Bills, R. E., 1953a. Rorschach characteristics of persons scoring high and low in acceptance of self. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 36 -38.
- Bills, R. E., 1953b. A validation of change in scores on the Index of Adjustment and Values as measures of changes in emotionality. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 135-138.
- Bills, R. M., 1953c. A comparison of scores on the Index of Adjustment and Values with behavior in level-of-aspiration tasks. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 206-212.
- Bills, R. E., 1954a. Acceptance of self as measured by interviews and the Index of Adjustment and Values. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 22.
- Bills, R. E., 1954b. Self-concept and Rorschach signs of depression. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 135-137.
- Bills, R. E., 1958. Manual for the Index of Adjustment and Values. Auburn, Ala.: Author.
- Block, J., & Thomas, H., 1955. Is satisfaction with self a measure of adjustment? *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 51, 254-259.
- Bonthius, R. H., 1948. Christian paths of self-acceptance. King's Crown Press.
- Brownfain, J. J., 1952. Stability of the self-concept as a dimension of personality. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 47, 597 -

606.

- Chandler, T. A., 1976. A note on the relationship of internality-externality, self-acceptance, and self-ideal discrepancies. *Journal of Psychology*, 94, 145~146.
- Chase, R. H., 1957. Self-concepts in adjusted and maladjusted hospital patients. *Journal of Consulting Psychology*, 21,
- Chassin, L., Presson, C. C., Young, R. D., & Light, R., 1981. Self-concepts of institutionalized adolescents: A framework for conceptualizing labeling effects. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 143~151.
- Chiappone, D. I., & Kores, W. H., 1979. Fatalism in coal miners. *Psychological Reports*, 44, 1175~1180.
- Cohen, L. D., 1954. Level-of-aspiration behavior and feeling of adequacy and self-acceptance. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 49, 84~86.
- Collingwood, T. R., 1972. The effects of physical training upon behavior and self attitudes. *Journal of Clinical Psychology*, 28, 583~585.
- Combs, A. W., 1949. A phenomenological approach to adjustment theory. *Journal Abnormal & Social Psychology*, 44, 29~35.
- Combs, A. W., & Snygg, D. 1959. Individual behavior. Harper.  
 (岩田不二夫・手塚郁恵訳 人間の行動 —行動への知覚的なアプローチ— (上・下), 岩崎学術出版社. 1970)
- Coons, W. H., McEachern, D. L., & Annis, H., 1973. Self-acceptance, acceptance of others, and verbal conditioning with mental patients. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 5, 290~296.
- Cowen, E. L., 1954. "Negative self-concept" as a personality measure. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 138~142.
- Cowen, E. L., 1956. An investigation of the relationship between two measures of self-regarding attitudes. *Journal of Clinical Psychology*,

12, 156~160.

- Cowen, E. L., Heilizer, F., Axelrod, H. S. & Alexander, S. 1957. The correlates of manifest anxiety in perceptual reactivity, rigidity, and self concept. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 405-411.
- Cowen, E. L., & Tongas, P. N., 1959. The social desirability of trait descriptive terms: Applications to a self-concept inventory. *Journal of Consulting Psychology*, 23, 361-365.
- Crowne, D. P., Stephens, M. W., & Kelly, R., 1961. The validity and equivalence of test of self-acceptance. *Journal of Psychology*, 51, 101-112.
- Crowne, D. P. & Stephens, M. W., 1961. Self-acceptance and self-evaluative behavior ; A critique of methodology. *Psychological Bulletin*, 58, 104-121.
- Deitz, G. E., 1969. A comparison of delinquents with nondelinquents on self-concept, self-acceptance, and parental identification. *Journal of Genetic Psychology*, 115, 285-295.
- Eastman, D., 1958. Self-acceptance and marital happiness. *Journal of Consulting, Psychology*, 22, 95-99.
- Feder, C. Z., 1968. Relationship between self-acceptance and adjustment, repression-sensitization and social competence. *Journal of Abnormal Psychology*, 73, 317-322.
- Fey, W. F., 1954. Acceptance of self and others, and its relation to therapy readiness. *Journal of Clinical Psychology*, 10, 269-271.
- Fey, W. F., 1955. Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 50, 275-276.
- Fey, W. F., 1957. Correlates of certain subjective attitudes towards self and others. *Journal of Clinical Psychology*, 13, 44-49.

- Friedman, J., 1955. Phenomenal, ideal, and projected conceptions of self. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 51, 611-615.
- Frisch, P., & Cranston, R., 1956. Q-technique applied to a patient and therapist in a child guidance setting. *Journal of Clinical Psychology*, 12, 178-182.
- Gildston, P., 1967. Stutterers' self-acceptance and perceived parental acceptance. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 59-64.
- Gough, H. G., 1960. The Adjective Check List as a personality assessment research technique. *Psychological Reports*, 6, 107-122.
- Gough, H. G., & Heilbrum, A. B., 1965. The Adjective Check List manual. Palo Alto, Calif. : Consulting Psychologists Press.
- Grace, H. A., 1953. The self and self-acceptance. *Educational Theory*, 3, 220-233.
- Grande, P. P., 1966. The use of self and peer ratings in a peace corps training program. *Vocational Guidance Quarterly*, 14, 244-246.
- Greene, R. L., Baucom, D. H., & Macon, R. S., 1980. Students' acceptance of high and low generalized personality interpretations. *Journal of Clinical Psychology*, 36, 166-170.
- Grigg, A. E., 1959. A validity test of self-ideal discrepancy. *Journal of Clinical Psychology*, 15, 311-313.
- Grube, J. W., Kleinhesselink, R. R., & Kearey, K. A., 1982. Male self-acceptance and attraction toward women. *Personality & Social Psychology Bulletin*, 8, 107-112.
- Grupp, S., Ramseyer, G., & Richardson, J., 1968. The effect of age on four scales of the California Psychological Inventory. *Journal of General Psychology*, 78, 183-187.
- Hanlon, T. E., Hofstaetter, P. R. & O'Connor, J. P., 1954. Congruence of self and ideal-self in relation to personality adjustment. *Journal of*

*Consulting Psychology*, 18, 215~218.

Havener, P. H., & Izard, C. E., 1962. Unrealistic self-enhancement in paranoid schizohenics. *Journal of Consulting Psychology*, 26, 65~68.

Kato, T., 1966. Self-concept of the physically handicapped in two kinds of twenty statements test. *Tohoku Psychologica Folia*, 25, 104~114.

Kennedy, P. M., 1958. Acceptance of self and acceptance of others as interdependent variables in interpersonal relations. Catholic University America Press.

Korner, I. N., Allison, R. B. Jr., Donoviel, S. J., & Boswell, J. D., 1963. Some measures of self-acceptance. *Journal of Clinical Psychology*, 19, 131~132.

LaFon, F. E., 1954. Behavior on the Rorschach test and a measure of self-acceptance. *Psychological Monograph*, 68-10 (Whole 381).

LaForge, R., & Suczek, R. F., 1955. The interpersonal dimension of personality: III an interpersonal check list. *Journal of Personality*, 24, 94~112.

Lebo, D., 1953. The development of client-centered therapy in the writings of Carl Rogers. *American Journal of Psychiatry*, 110, 104~109.

(伊東博編訳 カール・ロジャースの著作からみたクライエント中心療法の発展。ロジャース全集第17巻 クライエント中心療法の評価, 岩崎学術出版社, 1967)

Lepine, L. T., & Chodorkoff, B., 1955. Goal setting behavior, expressed feelings of adequacy, and the correspondence between the perceived and ideal-self. *Journal of Clinical Psychology*, 11, 395~397.

Levy, L. H., 1956. The meaning and generality of perceived actual-ideal discrepancies. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 396~398.

Lombardo, J. P., Fantasia, S. C., & Solheim, G., 1975. The relationship of internality-externality, self-acceptance, and self-ideal discrepancies

*Journal of Genetic Psychology*, 126, 281~288.

- Long, V. O., 1986. Relationship of masculinity to self-esteem and self-acceptance in female professionals, college students, and victims of domestic violence. *Journal of Counseling & Clinical Psychology*, 54, 323~327.
- Lowe, C. M., 1961. The self-concept. fact or artifact? *Psychological Bulletin*, 58, 325~336.
- Maslow, A. H., 1961. *Toward a psychology of being*. Van Nostland Company.
- (上田吉一訳 完全なる人間 魂のめざすもの, 誠信書房, 1964)
- Mitchell, J. V. Jr., 1962. An analysis of the factorial dimensions of the Bills' Index of Adjustment and Values. *Journal of Social Psychology*, 58, 331~337.
- Mitchell, J. V. Jr., 1963. self-family perceptions related to self-acceptance, manifest anxiety, and neuroticism. *Journal of Educational Research*, 56, 236~242.
- Moore, C. H., & Ascough, J. C., 1970. Self-acceptance and adjustment revisited: A replication. *Psychological Reports*, 26, 854~855
- Morgan, B., & Leung, P., 1980. Effects of assertion training on acceptance of disability by physically disabled university students. *Journal of Counseling Psychology*. 27, 209~212.
- Ohnmacht, F. W., & Muro, J. J., 1967. Self-acceptance: Some anxiety and cognitive style relationships. *Journal of Psychology*, 67, 235~239.
- Omwake, K. T., 1954. The relation between acceptance of self and acceptance of others shown by three personality inventories. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 443~446.
- Pedersen, D. M., 1969. Evaluation of self and others and some persona-

- lity correlater. *Journal of Psychology*, 71, 225~244.
- Phillips, E. L., 1951. Attitudes toward self and others. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 79~81.
- Pilisuk, M., 1963. Anxiety, self-acceptance, and open-mindedness. *Journal of Clinical Psychology*, 19, 387~391.
- Raimy, V. C., 1948. Self reference in counseling interviews. *Journal of Consulting Psychology*, 12, 153~163.
- Rigby, K., 1986. Acceptance of authority, self, and others. *Journal of Social Psychology*, 126, 493~502.
- Roberts, G. E., 1952. A study of the validity of Index of Adjustment and Values. *Journal of Consulting Psychology*, 16, 302~304.
- Roessler, R., & Greenfield, N. S., 1958. Personality determinants of medical clinic consultation. *Journal of Nervous & Mental Disorder*, 127, 142~144.
- Rogers, C. R., 1939. The clinical treatment of the problem child. Houghton Mufflin Company.  
 (友田不二夫訳 ロジャース全集第2巻 カウンセリング, 岩崎学術出版社, 1966)
- Rogers, C. R., 1942. Counseling and psychotherapy. Houghton Mufflin Company.  
 (友田不二夫訳 ロジャース全集第2巻 カウンセリング, 岩崎学術出版社, 1966)
- Rogers, C. R., 1944. The devlpmnt of insight in a counseling relationship. *Journal of Consulting Psychology*, 8, 331~341.  
 (伊東博訳 カウンセリング関係における洞察の発展。ロジャース全集第4巻 サイコセラピィの過程, 岩崎学術出版社, 1966)
- Rogers, C. R., 1947. Same observations on the priganization of personality. *American Psychologist*, 2, 358~368.

(伊東博訳 パースナリティの体制についての観察, ロジャース全集第8巻 パースナリティ理論, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., Kell, B. L., & McNeil, H., 1948. The role of self-understanding in the prediction of behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 12, 174~186.

(伊東博編訳 行動の予測における自己理解の役割, ロジャース全集第14巻 クライエント中心療法の初期の発展, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., 1949. The attitude and orientation of the counselor in client-centered therapy. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 82~94.

Rogers, C. R., 1950. The significance of self-regarding attitudes and perceptions. in Martin, L. R., (ed.) *Feeling and emotions*, McGraw Hill.

(伊東博訳 自己についての態度と知覚の意義, ロジャース全集第8巻 パースナリティ理論, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., 1951. *Client-centered therapy*. Houghton Mifflin.

(友田不二夫 ロジャース全集第3巻 サイコセラピー, 岩崎学術出版社, 1966./伊東博訳パースナリティと行動についての一理論, ロジャース全集第8巻 パースナリティ理論, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., 1951. perceptual reorganization in client-centered therapy. in Blake, R. R., & Ramsey, G. V., (ed.) *Perception: An approach to personality*. Ronald Press.

(伊東博訳 クライエント中心療法における知覚の再体制化, ロジャース全集第8巻 パースナリティ理論, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., 1952. *Client-centered therapy*. *Scientific American*, 187, 66~74.

(伊東博編訳 クライエント中心のサイコセラピー, ロジャース全集第14巻 クライエント中心療法の初期の発展, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., 1953. Some directions and end points in therapy. in Mo-



wrer, O. H., (ed.) *Psychotherapy: Theory and research*, Ronald Press.  
(伊東博訳 セラピーにおける方向と終極点, ロジャース全集第4巻  
セラピーの過程, 岩崎学術出版社, 1966)

Rogers, C. R., & Dymond, R., 1954. *Psychotherapy and personality change*. University of Chicago Press.

(友田不二夫訳 人格転換の心理, 岩崎書店 1957)

Rogers, C. R., 1959. The essence of psychotherapy: A client-centered view. *Annals of Psychotherapy*, 1, 51-57.

(伊東博編訳 サイコセラピーの本質: クライアント中心の観点, ロジャース全集第15巻 クライアント中心療法の最近の発展, 岩崎学術出版社, 1967)

Rogers, C. R., 1961. *On becoming a person*. Houghton Mufflin Company.

Rosenman, S., 1955. Changes in the representation of self-other, and interrelationship in client-centered therapy. *Journal of Counseling Psychology*, 2, 271-278.

Rubin, I. M., 1967a. The reduction of prejudice through laboratory training. *Journal of Applied Behavioral Science*, 3, 29-50.

Rubin, I. M., 1967b. Increased self-acceptance: A means of reducing prejudice. *Journal of Personality & Social Psychology*, 5, 233-238.

Sheerer, E., 1949. An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in the counseling cases. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 169-175.

Shepard, L. A., 1979. Self-acceptance: The evaluative component of the self-concept construct. *American Educational Research Journal*, 16, 139-160.

Solway, K. S., & Fehr, R. C., 1969. Situational variables and self-acceptance. *Psychological Reports*, 25, 253-254.

- Spivack, S. S., 1956. A study of a method of appraising self-acceptance and self-rejection. *Journal of Genetic Psychology*, 88, 183-202.
- Stone, L. A., 1964. A factor analysis of the Berger Willingness to accept limitations scales- A brief. *Journal of Counseling Psychology*, 11, 285.
- Streitfeld, J. W., 1959. Expressed acceptance of self and others by psychotherapists. *Journal of Consulting Psychology*, 23, 435-441.
- Strong, d. j., & Feddr, D. D., 1961. Measurement of self-concept: A critique of the literature. *Journal of Counseling Psychology*, 8, 170 - 178.
- (伊東博訳編 カウンセリングの過程 カウンセリング論集 3, 209-227. 誠信書房, 1964)
- Suinn, R. M., 1961. The relationship between self-acceptance and acceptance of others. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 63, 37 -42.
- Suinn, R. M., & Hill, H., 1964. Influence of anxiety on the relationship between self-acceptance and acceptance of others. *Journal of Consulting Psychology*, 28, 116-119.
- Swanson, B. M., & Parker, H. J., 1971. Parent-child relations: A child's acceptance by others, of others, and of self. *Child Psychiatry & Human Development*, 1, 243-254.
- Tamkin, A. S., 1957. Selective recall in schizophrenia and its relation to ego strength. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 55, 345 - 349.
- Viney, L. L., 1966. Congruence of measures of self-regard. *Psychological Record*, 16, 487-493.
- Watson, A. K., 1985. Apprehension about communication and self-acceptance: A correlational study. *Perceptual & Motor Skills*, 61, 821 - 822.

- Wenkart, A., 1955. Self-acceptance. *American Journal of Psychianalysis*, 15, 135~143.
- Wylie, R. C., 1961. The self concept: A critical survey of pertinent research literature. Univ. of Nebraska Press.
- Wylie, R. C., 1974. The self concept (rev ed.). Univ. of Nebraska Press.
- Wylie, R. C., 1979. The self concept (rev ed.) vol. 2. Theory and research on selected topics. Univ. of Nebraska Press.
- Williams, J. E., 1962. Acceptance by others and its relationship to acceptance of self and others; A repeat of Feys' study. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 65, 438~442.
- Winkler, R. C. & Myer, R. A., 1963. Some concomitants of self-ideal discrepancy measures of self-acceptance. *Journal of Counseling Psychology*, 10,
- Woods, P. J., 1983. How to determine one's value as a human being. *Journal of Rational-Emotive Therapy*, 1, 29~31.
- Wrenn, C. G., 1958. Self-concept in counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 5, 104~109.
- Wyer, R. S., 1965. Self-acceptance, discrepancy between parent' perceptions of their children, and goal-seeking effectiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 311~316.
- Zelen, S. L., 1954. The relationship of peer acceptance, acceptance of others, and self-acceptance. *Proceedings of the Iowa Academy of Science*, 61, 446~449.
- Ziller, R. C., Hagey, J., Smith, M., & Long, B. H., 1969. Self-esteem: A seteem: self-social construct. *Journal of Cousulting & Clinical Psychology*, 33, 84~85.
- Zimmer, H., 1954. Self-acceptance and its relation to conflict. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 447~449.

- Zion, L. C., 1965. Body concept as it relates to self-concept. *Research Quarterly*, 36, 490-495.
- Zuckerman, M., Bear, N., & Monaskin, I., 1956. Acceptance of self, parents, and people in patients and normals. *Journal of Clinical Psychology*, 12, 327-332.
- Zuckerman, M. & Monaskin, J., 1957. Self-acceptance and psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 145-148.
- Zuckerman, M., & Oltern, M., 1959. Some relationships between maternal attitude factors and authoritarianism, personality needs, psychopathology, and self-acceptance. *Child Development*, 30, 27-36.

#### 4 その他の領域

- Gross, A. E., et al. 1979. Initiating contact with a women's counseling service: Some correlates of help-utilization. *Journal of Community Psychology*, 7, 42-49.
- May, G. G., 1977. *Simply sane: Stop fixing yourself and start really living*. Paulist, N. Y.
- Trexler, L. D., 1976. Frustration is a fact, not a feeding. *Rational Living*, 11, 19-22.
- Trobitsh, W., 1976. *Love yourself: Self-acceptance and depression*. Inter-Varsity Press.  
(狩栖健太郎訳 自分自身を愛する, すぐ書房, 1981)
- Vingoe, F. J., 1967. Self-awareness, self-acceptance, and hypnotizability. *Journal of Abnormal Psychology*, 72, 454-456.
- Vits, P. C., 1985. *Psychology as religion: The cult of self-worship*. Eerdmans Publishing Company.

## 自己受容に関する国内研究

- 土沼雅子・水島恵一 1982. 人間性の深層 不安と愛の人間学, 創元社.
- 福山清蔵 1976. 母親の自己受容と子ども受容 -役割を媒介として-, 日本女子大学児童研究所紀要, 4, 51-59.
- 福山清蔵 1981. 現実像・理想像についての一考察 -カウンセリング・プロセスの分析-, 立教大学教育学科年報, 24, 69-80.
- 藤原喜悦 1974. 自己概念の研究(1), 日本教育心理学会第16回総会発表論文集, 232-233.
- 林 潔 1965. カウンセリング過程についての一考察, 千輪浩先生古稀記念心理学論集, 209-220. 誠信書房.
- 板津裕己 1983. 自己受容性の研究, 日本応用心理学会第50回大会発表論文集, 37.
- 板津裕己 1984. 自己受容性の研究(2), 日本応用心理学会第51回大会発表論文集, 92.
- 板津裕己 1986a. 自己受容性の研究(3), 日本応用心理学会第53回大会発表論文集, 129.
- 板津裕己 1986b. 自己受容性の研究(4) -対人関係観との関わりについて- 日本社会心理学会第27回大会 / 日本グループ・ダイナミックス学会第34回大会合同大会発表論文集, 211-212.
- 板津裕己・中村昭之 1987. 自己受容性の研究(5) -充実感との関わりについて(その1)-, 日本心理学会第51回大会発表論文集, 524.
- 梶田叡一 1966. 2者関係に及ぼす自己評価の効果 -他者からの働きかけに対する反応を規定する要因として-, 教育・社会心理学研究, 5, 231-238.
- 梶田叡一 1967. 自己評価と自己のパフォーマンスの評価 -他者に感じる魅力を規定する要因として-, 心理学研究, 38, 63-72.
- 梶田叡一 1981. 自己意識の心理学, 東京大学出版会.

- 亀倉孝順 1968. 適応性と自己受容に関する研究, 日本教育心理学会第10回総会発表論文集, 200~201.
- 柏木恵子 1983. 子どもの「自己」の発達, 東京大学出版会.
- 加藤隆勝 1960. 自己意識の分析による適応の研究, 心理学研究, 38, 53~63.
- 加藤隆勝 1962. 青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容について, 岐阜大学学芸部研究報告(人文科学), 14, 83~89.
- 加藤隆勝 1962. 青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容, 日本心理学会第26回大会発表論文集, 223.
- 加藤隆勝 1975. 青年期における自己意識の構造(1) - 自己受容と自己批判について -, 日本心理学会第39回大会発表論文集, 398.
- 加藤隆勝 1977. 青年期における自己意識の構造, 東京大学出版会.
- 加藤孝義 1967. T S Tによる肢体不自由者の自己観について, 臨床心理, 5, 154~164.
- 川岸弘枝 1972. 自己受容と他者受容に関する研究 - 受容測度の検討を中心として -, 教育心理学研究, 20, 170~177.
- 川岸弘枝 1973. 身体障害者の自己受容に関する研究, 日本教育心理学会第15回総会発表論文集, 572~573.
- 北村晴朗 1977. 新版自我の心理, 誠信書房.
- 国分康孝 1979. 心とこころのふれあうとき カウンセリングの技法をこえて, 黎明書房.
- 宮沢秀次 1976. 青年期の自己概念に関する研究(1) - 自己受容性の年齢的変容について -, 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 242~243.
- 宮沢秀次 1978. 青年期の自己概念に関する研究 - 自己受容性測定項目の予備的検討 -, 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 462~463.
- 宮沢秀次 1979a. 青年期における自己受容性の一研究, 名古屋大学教育学部教育心理学科紀要, 25, 105~117.
- 宮沢秀次 1979b. 青年期における自己受容性の研究, 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 258~259.

- 宮沢秀次 1981. 女子青年における自己受容性の発達の研究, 日本心理学会第45回大会発表論文集, 461.
- 宮沢秀次 1983. 青年期の自己受容性に関する研究 -女子中学生について-, 日本心理学会第47回大会発表論文集, 482.
- 水口禮治 1985. 人格構造の認知心理学的研究, 風間書房.
- 水島恵一 1977. 人間学, 有斐閣.
- 中西信男 1980. 自己と測定 自己理解の援助, サイコロジー, 1, 50~55.
- 中西信男・鏑幹八郎(編) 1981. 自我・自己 心理学10, 有斐閣.
- 名城嗣明 1961. 自己受容と他者受容との関係についての実験的研究, 琉球大学教育学部研究集録, 5, 49~64.
- 名城嗣明 1980a. 自己受容と職場のモラルとの関係について(I), 琉球大学教育学部紀要, 24, 203~225.
- 名城嗣明 1980b. 自己受容と職場のモラルとの関係について(II), 九州心理学会第41回大会発表論文集, 25.
- 名城嗣明 1982. 自己受容度と未来観との関係について, 琉球大学教育学部紀要, 25, 203~210.
- 佐野竹彦 1976. 現実自己と理想自己の差異の測定法について, 日本心理学会第40回大会発表論文集, 933~934.
- 佐野竹彦 1977. 現実自己の差異の測定法について, 愛知教育大学研究報告(教育科学), 26, 139~148.
- 佐藤純子・沢崎達夫 1985. 大学生の自己受容に関する研究(1), 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 410~411.
- 沢崎・真仁田・小玉 1981a. 青年期における自己認知と自己受容に関する研究(1), 筑波大学教育相談研究, 19, 43~60.
- 沢崎・真仁田・小玉 1981b. 青年期における自己認知と自己受容に関する研究(2), -数量化理論第Ⅲ類を用いて-, 筑波大学学校教育部紀要, 3, 133~150.
- 沢崎・真仁田・小玉 1982. 青年期における自己認知と自己受容に関する研究

(3), -自己受容と性格・父母の養育態度等との関係について-, 筑波大学教育相談研究, 20, 59~73.

沢崎達夫 1984. 自己受容に関する文献的研究(1), -その概念と測定法について-, 筑波大学教育相談研究, 22, 59~67.

沢崎達夫・佐藤純子 1984. 大学生の自己受容測定尺度作成の試み, 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 366~367.

田端純一郎 1985. 自我同一性の研究(XI) -自我同一性スティタスと自己受容, 疎外感, 認知の複雑性-, 関西学院大学臨床教育心理学研究, 11, 1~6.

田端純一郎 1986. 自我同一性の研究(14) -親への態度との関係-, 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 340~341.

高橋泰子 1978. 職業適性意識と自己受容 -保専生の場合-, 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 460~461.

高瀬・小島・東・荻野・大沢・藤本 1961. 精神薄弱児の人格発達に関する研究 第3報-信楽寮を中心として: 自己受容との連関において-, 日本教育心理学会第3回総会発表 教育心理学年報, 1, 102~103 (発表要旨).

戸荻正人 1960. 自己概念と自己受容 -パーソナリティ構造の安定性の指標の検討-, 日本心理学会第24回大会発表論文集, 210~211.

戸荻正人 1961. パーソナリティの適応の指標について -自己受容の測度の検討-, 愛媛大学紀要(教育科学), 19, 25~34.

富田・西本・落合 1986. A C L 日本語版標準化の基礎的研究(5), 日本心理学会第50回大会発表論文集, 584.

鳥居・福本・高橋 1985. 自己概念の形成過程に関する縦断的研究Ⅲ, 日本女子大学児童研究所紀要, 7, 103~122.

鳥居・福本・永田・安藤・城戸 1986. 自己概念の形成過程に関する縦断的研究Ⅳ, 日本女子大学児童研究所紀要, 8, 43~71.

上田吉一 1963. カウンセリングの目標に関する研究(4) -精神の健康性と自己概念-, 日本教育心理学会第5回総会発表, 教育心理学年報, 3, 81(発



表要旨).

- 上田吉一 1965. カウンセリングの目標に関する研究(5) –自己受容と他者受容–, 日本教育心理学会第7回総会発表論文集, 344~345.
- 上田吉一 1969. 精神的に健康な人間, 川島書店.
- 上田吉一 1976. 自己実現の心理, 誠信書房.
- 上田吉一 1983. 動機と人間性, 誠信書房.
- 我妻 洋 1964. 自我の社会心理, 誠信書房.
- 柳井 修 1969. 自己受容と適応の関係についての研究, 八幡大学論集, 20, 118~113.
- 柳井 修 1979. 統制型と自己意識の関係, 日本心理学会第43回大会発表論文集, 508.
- 吉川房枝 1960. 青年期における自我の形成, 教育心理学研究, 8, 26~37.
- 吉川 茂 1984a. Ambiguity Tolerance と適応のダイナミクス (VII), 日本応用心理学会第51回大会発表論文集, 49.
- 吉川 茂 1984b. Ambiguity Tolerance と適応のダイナミクス (IX), 日本心理学会第48回大会発表論文集, 625.
- 吉川 茂 1985. Ambiguity Tolerance と自己受容および達成動機について, 関西学院大学臨床教育心理学研究, 11, 1~7.

## 引用・参考文献

(文献目録にあげた文献を除く)

- 板津裕己 1987. 自己受容尺度短縮版作成の試み (未発表論文).
- 伊藤研一 1980. 試訳版 P O I (Personal Orientation Inventory: 自己実現尺度) の相関研究 東京大学教育学部教育相談室紀要, 3, 113~117.
- 国分康孝・国分康子 1984. カウンセリング Q & A 1 誠信書房.

Mostakas, C. E., 1956. The teacher and the child. -Personalinteraction in the classroom-

(浪花 博訳 1968. 問題児の成長と人間関係 精神科学全書13, 岩崎学術出版社)

水島・村瀬(編) 1967. 心理療法 臨床心理学講座第3巻 誠信書房.

村山・粟津・野島 1977. 自己実現スケールの作成 九州大学心理教育相談室紀要, 3, 117~130.

長島貞夫(監) 1983. 性格心理学ハンドブック 金子書房.

中村 元(編) 1963. 自我と無我 -インド思想と仏教の根本問題- 平楽寺書店.

中西・那須・浅田 1978. 青年期の自我構造に関する研究 相談学研究, 11, 57~67.

西川隆蔵 1986. パーソナリティにおける開放性-閉鎖性次元の研究(1) -開放性・閉鎖性次元の全体的構造- 日本心理学会第50回大会発表論文集, 562.

Rosenberg, S. E., 1965. Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Press.

椎野信治 1966. 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究, 14, 165~172.

Silber, E. & Tippett, J. S., 1965. Self-esteem: Clinical assessment and measurement validation. Psychological Reports. 16 1017 ~ 1071.

Siroka, R. W., Schloss, G. A., & Siroka, E. K., 1971. Sensivity training and group encounter. Grosset & Gunlop.

(伊東・中野訳 グループエンカウンター入門, 誠信書房, 1976)